

るなど、農業技術もかなり進歩した。

しかし木曾川の氾濫のたび洪水によって分流が溢れ、土地は荒れ、収穫は皆無となるなど凶作もあり、このために飢饉を招く苦難の時代が続き、世相は混乱し人身売買が各地で公然と行われた。

また農民が生産した米をはじめ各種の畑作物は領主、地頭、荘官に納め、ほとんど手もとに残らず厳しい方法がとられ、農民の反発が各地で起る原因となっていた。

この時代にはまだ武士、農民の身分は確立しておらず、武士でも平常は農業につき、戦いが発生すると近在の屈強な農民を募って立ち上がるということであった。

寺院と神社

中世社会の中で新しい仏教の真宗、禅宗の発展が目ざましく、とくにこの地方では既成の教えにかわって禅宗系の仏教が人々の心をとらえ、大きな勢いとなって広がった。

扶葉町山名に生まれた高僧悟溪宗頓が、この地に禅の教えを説いたのもこの時代であって、町内の徳林寺をはじめ妙徳寺、桂林寺の創建も時期が同じで、村の発達と併せて本町においても禅宗の移入がさかんであったことを示し、

表2-5 寺院の宗派別数（中世紀においてすでに創建されて寺院・尾張志による）

郡・村	天台宗	真言宗	浄土宗	禅宗	真宗	日蓮宗		計
丹羽郡の全域	四	一三	一三	五五	三三	七		一二五
大口町	一	一(一)	一(一)	五(六)	一(一)	一		

(一)は江戸期における寺院数

薬師如来像や長松寺に安置されている鑄鉄地藏尊像などいずれも鎌倉時代から室町時代の作で、中世の美術を現代に伝えるとともに、新しい仏教の広がりや民間信仰の芽生えを示している。

また町内の神社の勧請をみても、この時代からの伝承が多く農地の開発による生産の増大、村経済の発達や寺院の創建と同様に、村づくりが本格的に行われた年代でもあることを物語っている。

第二節 戦 国 時 代

大久地城 麻のごとく乱れた戦国争乱の社会は、支配者である武士階級に対して農民の激しい抵抗―土一揆、逃散―など新しい力を生んでいったが、しだいに統一の気運に向っていった。

その最初の成功者は織田信長であり、尾北の地は、彼の活躍の基盤となったところである。(これについては従来
の歴史の中にあきらかになつていかなかった。)

織田氏は平家の出であり、代々越前国織田庄の神官で管領斯波氏に仕えていた。

斯波代が尾張の守護となつたので、その名代(守護代)となつて尾張に移り、応永七年(一四〇〇年)には織田郷広(稲沢の下津(おりず))に城を築くまでに至り、しだいにその勢力を固めてきた。

郷広には、敏広、広近、敏定の三子があり、長男敏広のために岩倉城を築いて尾張上四郡(丹羽、葉栗、中島、春日井)を統治させ、三男敏定を清洲城において尾張下四郡(海東、海西、愛知、知多)を統治させた。二男広近には、本町小口おぐちの地内に城を築かせ、信州、美濃に備えさせた。

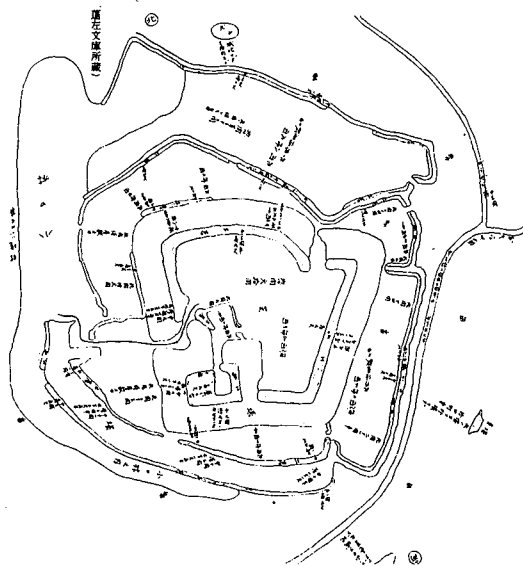


図2-49 「大久地城」の古図

広近は、早くから父郷広の代理として京都の斯波氏のもとに赴いて各地に転戦している。とくに遠江における広近の功業は大きく遠江守の受領もその故であった。戦国における弱肉強食、骨肉相喰む時代にあつて、実力と人間的教養の高さにおいて一族中群を抜いた存在であつた、父郷広は尾張織田のささえとするためにこの広近に期待をかけていたと思われる。

長祿三年（一四五九）大久地城（小口城）は完成し、翌年の寛正元年に広近は入城した。

城の広さは東西五十七間（約一〇二メートル）、南北六十間（約一〇九メートル）でその周りを二重堀でめぐらし、城の西南に五メートル余の高さの土壘の上に櫓を構えた。

また城外には十二の町名をもつ城下町と侍屋敷をもち（下小口酒井史郎宅所蔵古文書）家老をはじめとして家士の数も多く、かなりの格式をもつ雄城であつたといわれる。

以来その子、常任がこれを継ぎ、子孫同族城主となり約百年間保城したが、永祿七年（一五六四）織田信長が生駒氏らとともにこれを攻めついに落城した。

なお、広近は大久地城築城から十年後、さらに犬山の

城址碑文

城址に建つ碑標（大正五年十月二十五日建之）

表面 小口城址 愛知県
裏面

此城東西五十間、南北五十八間、四方二重堀、其遺址彷彿可推知、文明中織田廣近居焉、廣近通称與十郎、任遠江守、斯波老臣織田鄉廣之仲子也。郷廣居下津城爲斯波氏所重任、長子敏廣築城於岩倉爲之織田宗家。廣近分家居小口城、時濃州之軍屢襲尾州、廣近乃築城於天山以備之、而身常在小口城延德三年卒。子常任亦兼兩城主、称大和守、常任子常孝夭。其子勝秀爲小田井城。同族信安領本城及信安築城于勝幡、其子信康居之。後爲信長所攻、遂爲廢城。蓋自築城至廢城殆一百年云。今當大典、建碑傳之後世。

大正四年十一月 仙田半耕謹書

木ノ下に城を築いてここに居住し、美濃の進攻に対して構えを強化した。

この木ノ下城と、大久地城を往来した道を「織田街道」といって現在も往来がさかんである。

こうした広近の功業によって、広近在世中は京都における応仁の乱に弟敏定が参加したぐらいで尾北の地は、一応平穏であったが、すでに同族の争いは織田家の中にも燃えあがっていた。それは広近の力によってわずかにおさえられていたともいえる。

珍嶽常寶菴主壽像贊并序○有心宗附
師冲眞徳林事
清和帝後胤源元勳武衛大將軍幕下功臣織田遠
州太守廣近公迺鄉廣公仲子也余兄在州之治執
州事廣近公輔佐之僉曰關左雄傑之士也管年宗
族兄弟閭于牆茨壘固壁而雖曰挑戰凌勝蓋厥累
卵之危也外禦其侮遂同好採肩渝其介也事君則
忠肝義膽能致其身一令則政化民服一變則家齊
國治吁寬猛莫不兼備矣其雄也已變衛霍之勳其
譽也不屑蕭曹之功可謂翼君正民之道明焉其伎

藝也矯矢則垂獸相號飛禽皆感由基之蒲盧共遊
其殼中加之臂蒼牽黃臺上常歌野鷹來錦囊又八
造次弄之顛沛按之明皇所夢回向院一枝之餘音
耶抑亦宇治朗菴主一曲之正脈耶蚤有謝世之榮
志嘗扣正眼天先和尚之室親受菩薩戒諱曰常寶
別稱號珍嶽領會洞下五位君臣寶鏡三昧之旨凌
然高挂冠剝除鬚髮脫朝服著緇衣既割邑艸創精
舍曰徳林奉敦請金寶山悟谿大和尚爲中興開山
而菴主乃爲檀度矣於茲大心老和尚提錫斧於瑞

広近は禪によつて心を修め、(法名を珍嶽常宝という)文
明六年(一四七四)小口地内に徳林寺を再建し、美濃にお
ける臨濟禪の巨峰悟溪禪師を開山とした。徳林寺は寿岳禪
師がこれを継ぎ、寿岳派の本山として臨濟の宗風を揚げる
古道場となつた。また広近は禪による修練とともに、弓の
名手として名が高く、かつ尺八をよくした。

彼の隠居地を万好軒といったが、それは現在の妙徳寺で
ある。広近を讃えた悟溪禪師の偈が、臨濟宗虎穴録に残つ



図2-50 壽嶽派古道場碑

泉先廬、領眾匡徒之日就、菴主私第、遊息之次、木蘭安陀會傳付之、菴主于今挂著、肩上然、後營居於大地之邑、爲菟裘之地、庶民子來、不日而落成矣、菴齋、扁曰萬好也、梅花無盡藏、萬里翁所立也、蓋黃太史之萬事偶好、司馬公之謂乎、又以高枕二字、欲額一室、取杜拾遺之入簾殘月影、高枕遠江聲者、也於、是乎、潔齋精進、而晨香夕誦、入念佛三昧、此是菴主、圓淨活脫、無礙自抵日、用行履之處也、一日其孝子、寬近命工繪菴主壽像、菴主就予求讚、不獲拒、繫其

上以辭辭、曰胸襟洞達、英氣天資、仁愛如春、之煦、威容似霜、之放、有時拈入、以爲塵尾、有時燦、莫耶、而斬、猛兇、著解脫衣、纓三玄、弩被忍辱、鎧、五、位、旗、克繼、箕裘之家業、親詣寶鏡之宗師、入魔入佛、絕、模、絕、規、真諦俗諦有爲無爲、謂之在家菩薩、豈非當世毗尼是故、擊禪無明之窠、曰打破有漏之藩籬、伏願、係不老千秋之壽、洪無疆萬世之基、昔延德三載、龍集辛亥、秋八月如意珠日前臨川春澤、梅心瑞、肅書

ている。

悟溪和尚は、扶桑町南山名の出身で、臨濟宗東海派の開祖で、近くには顕法寺、瑞林寺などその開いた寺も多くある。

戦国末期、尾北の地に居住し、勢力を誇った豪族には織田一族をはじめ、丹羽郡に生駒氏、堀尾氏、前野氏、兼松氏、青山氏、浅野氏、前田氏などがまた、海部郡には蜂須賀氏、中島氏らがあつたが、これらを統合しその力をもつて天下の制覇に成功したのが織田信長である。

とくに信長の成功の因は、制海権をもつ津島の堀田氏と国内交通業情報網をにぎる小折の生駒氏と握り、彼等をその掌下に擱んだことにあることを忘れてはならない、これは従来の歴史には大きく現れていなかった事柄であろう。

生駒氏 生駒氏は、大和生駒地方に住んでいた馬借であるといわれる。

馬借とは現在の運送業者である。当時戦国争乱の世にあつて、運送の目的を達成するには、相当の資力と天下に情

報網を持ち、さらに各地の豪族と交渉がなければならなかった。

生駒氏は、すでに大きな力を持った馬借であり、雄飛するための地の利を尾張に求めて、小折の地に移住したのが文明の頃という。以後この地に力を蓄えて生駒家長に至った。そして信長と結んだのである。

信長は、織田家系譜によれば必ずしも主流とはいえないが、下剋上の時代にあつてしだいに勢力を伸長し、父信秀の代には、尾張における実権を確保するに至ったが、さらにこれを拡大していったのである。

信長の天下制覇の基盤となったのは、彼が津島の堀田氏と結んで海上権を握ったことと、生駒氏と結んで陸上交通権を保持したことによることを忘れてはならない。

生駒氏の祖家広は、前書のように文明の頃大和生駒より小折に移住したといい、生駒家の久昌寺内の墓地にある彼の碑には、鉄船常横大禪定門といつて小折生駒の先祖となっている。また久昌寺の古鐘にも当時勧進の大檀那としてつぎのように刻まれた文がある。

本願主生駒左京進家広澎湖十方檀那勧進至求之也

尾州丹羽郡稻木庄柳橋郷小折村

慈雲山龍徳寺鐘仍以千 明応六丁巳十二月吉日

大工羽黒南金屋 太郎左衛門尉藤原宗次

家広の子豊政は、大久地城主織田信康に仕えたが、家広の女が嫁いでいる土田の郷士土田政久を、信康の命によって養子として生駒の姓を与えたが、この政久の子親政が信長、秀吉に仕えたのち、讃岐高松城六万石の城主となっている。

のち本家小折生駒は、信長、信忠没後、自家の出である信雄に賭けたが、信雄が秀吉によって没落したために一家衰落の道を進むことになるが、讃岐生駒は大名として一時盛大になったのである。

また生駒家は、尾北の豪族前野村（現江南市前野）の前野氏（吉田氏の祖）蜂須賀村の蜂須賀氏と結び、新興の織田信長を盟主とした。

したがって、信長を盟主とする生駒、前野、蜂須賀、土田、坪内など当地方における豪族は、小折村の生駒邸（小折城）にしきりに出入りして、天下制覇への策を練つたと見られる。

生駒家長の女は、信長の室となり、その子信忠、信雄徳川信康の室の二男一女を生んで、のちには信長の正室となつている。

信長成功の基は、この小折城における会議にはじまったといつても過言でないし、織田家の天下制覇がつづいたならば、生駒氏の存在は定めし重要な位置にあつたと思われるが、秀吉、家康の実力の間に陥没した織田信雄と運命をともにした。

生駒家は、以後代々尾張藩年寄として、三千石（のち四千石）明治維新時には、家老として、尾張藩の運命を開拓せんとした。

この生駒氏が信長と組んで、尾張制圧の第一にとりくんだのが、岩倉城と大久地城の攻撃であり、岩倉城は永禄元年（一五五八）浮野合戦の敗北を契機として滅亡し、ついで大久地城攻めには、丹羽長秀とともに、前野党らを引きつけて攻めたて大手門の戦いで城中からの鉄砲に股を射貫かれて退いている。しかし丹羽長秀と城代中島豊後守との交渉によって、大久地城は永禄七年に落城し、築城以来、百十年にしてその幕を閉じた。

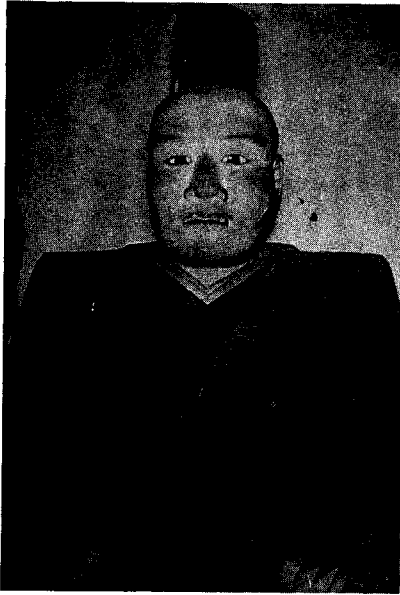


図2-51 木仏像堀尾茂助吉晴

堀尾茂助

吉晴

吉晴は、丹羽郡御供所村（現大口町大字豊田）の人で、先祖は京師方面よりこの地に移り住んだもので、堀尾恭氏による「堀尾吉晴戦功記」によれば、天武天皇の皇子高市親王の系である高階氏を称し、恭時（吉晴の父）十代前の祖邦経のころ当地に移住したという。（丹羽郡誌）

戦国末期には、当地の豪族として相当大きな力を持ったようであるが、この吉晴に至って信長の栄運とともに家運一時に栄えたものである。

これは吉晴が、とりわけ豪勇智略にすぐれ、信長、秀吉とその主君運がよかったためである。

生駒氏といい、堀尾氏といい当時の豪族の先祖の系譜が明らかでないのは、戦国争乱の時代に巧みにその時運にのって栄えたもので、古い格式系統というものはなかったものと思われる。

諸書の伝えるところによれば、吉晴は幼名を仁王丸といい、容ぼう端正、性温和一見婦女子を思わせるものがあつたという。

永祿元年（一五五八）信長に従って、岩倉城の攻略に参加し、御供所付近の戦や浮野合戦において、その叔父修理亮方泰とともに勇敢に戦いその豪勇が一時に名高くなった。

そして元亀元年（一五七〇）の江州浅井攻め、天正三年（一五七五）の三河長篠の戦い、翌年の一向一揆の征

伐などつぎつぎと武功を樹てた。秀吉は、彼に千五百石を贈るとともに、母衣（ほろ）着用を許した。

さらに、天正六年からの中国毛利攻め、天正一〇年の明智光秀との天王山の戦い、天正一一年の柴田勝家の北陸北庄攻めとかがやく武功をおさめ、若狭国高浜一万七千石の大名となった。

この間、毛利攻めで高松城の水攻めに城将清水宗治と交渉した彼の円熟した人柄は、有名な物語となっている。

天正一八年、秀吉が北条氏を小田原に攻めた戦では、堀尾金助が十八才でこれに参加し戦死をとげている。

小田原の戦いののち、吉晴は、遠州浜松十二万石の大名となり、秀吉からは「天下無双の豪勇」と賞詞を受けている。

秀吉の死後大阪城三老の一人となったが、石田三成と不仲であり、徳川家康の知遇を受けてこれに傾いていた。慶長五年の関ヶ原の合戦後、出雲国二十三万石の領主となり、徳川に仕える身となったが、慶長一七年六十九才で没した。後二十五万石の大名となったが三代目忠晴に至って、継嗣なく家は断絶した。

かかる郷土大口出身の戦国の名将堀尾茂助吉晴も、秀吉に仕えて名を得てからは、家郷を離れ諸国に転戦し、住むところもまたその在城つぎつぎと変わって、ほとんど郷里御供所に住んでいなかったと思われる。御供所の地には、叔父修理亮方泰が留守を引きうけたと思われる。

豊田八剣社の創立は、棟札の写しによつて永徳二年（一三八二）といわれるが堀尾家代々崇敬の神社として、雲州大守堀尾忠晴の再建奉仕をうけている。以後は堀尾家の没落によつて御供所村住民の奉仕によつて再建をされている。堀尾金助の母が、小田原ノ陣において戦没した金助の菩提を弔うために、名古屋熱田の裁断橋の擬宝珠に涙の文字を刻んだものが現存し、その銘文を讃えるとともに、金助の家系論が問題となった。



図2-52 木仏像金助の母

熱田裁断橋の擬宝珠の刻文はつぎの通りである。

てんしょう(天正)十八ねん、二月十八日にをだはら(小田原)への御ぢん(御陣)ほりをきん助と申十八になりたる子をたたせてより又ふためとも見ざるかなしさのあまりにいまこのはしをかける成

ははの身にはらくるい(落涙)ともなり、そくしんじょうぶつ(即身成仏)し給へ

いつがんせいしゅん(逸岩世俊)と後のよの又のちまで此かきつけを見る人は念仏申給へや、卅三年のくやう也

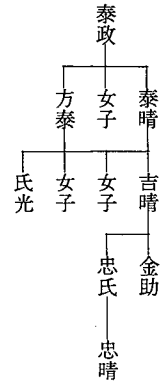
人の命のはかなさと、なき子を偲び、その靈を弔わんとする母の至情は、長く世のこれを見る人の心を打つとともに、その銘文を讃えている。

この堀尾金助なる人物であるが、従来は、堀尾茂助吉晴の長男であるとされてきたが、最近になって御供所在の曹洞宗桂林寺より出た古文書、古城跡由来記なるものがあり、それに金助は、茂助の叔父修理亮方泰の子であると記載されていたため、その正否をめぐって郷土史家の論議をよんだ。

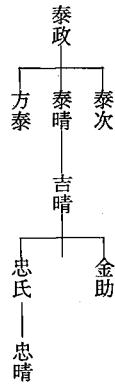
従来、堀尾金助は堀尾茂助の長男なりとの説の根拠は京都妙心寺の塔頭であり、茂助夫妻の建立になる堀尾家菩提寺たる春光院に在る堀尾家系図(注1)太田亮氏編姓氏家系辞典(注2)春日井市堀尾家系譜(注3)などである。

これらにはいずれも金助は茂助の長男であると記載されている。

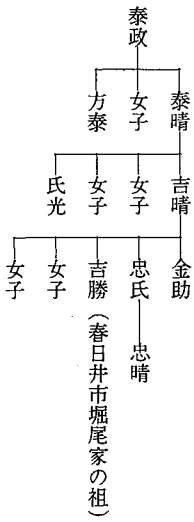
〔注1〕 京都妙心寺春光院藏堀尾家系図（概略）



〔注2〕 太田亮氏編 姓氏家系辞典

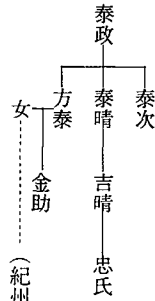


〔注3〕 春日井市堀尾家系図（概略）



吉勝（春日井市堀尾家の祖）

〔注〕 古城跡由来記 堀尾家系図



なお、松江市に居住の史家妹尾豊三郎氏の著「松江開府物語」の堀尾公三代事蹟の文中に出てくる相当詳細なる堀尾家系譜にも金助は、吉晴の子で、長女勝山(号)に続く嫡子となっている。

金助、方泰子息説に対する史家の反ばくの説の根拠となっているのは、

- 1 春光院建立由来、吉晴が嫡子の菩提のために春光院を建立したとの説。
 - 2 諸家に存在する堀尾氏系譜がいずれも吉晴の長男説をとっていること。
 - 3 方泰、吉晴、金助三者の年令関係の矛盾。
 - 4 古城跡由来記の記述のあいまい性。(史料的价值)
- である。

春光院には、吉晴夫妻とともに、金助の木像や墓碑、系図が保存されている。なお、年令について考察すると金助が方泰の子とすれば、方泰七十才代になるので、夫人と三十の年令差をもつことになる。

さらに、江南市前野の吉田家文書の中の千代女きき書によれば、金助は、吉晴の弟であるとするされている。

しかしこれらのことは、必ずしも方泰子息説を否定する根拠ともなり得ないし、方泰の剛勇をしたい、その年老い

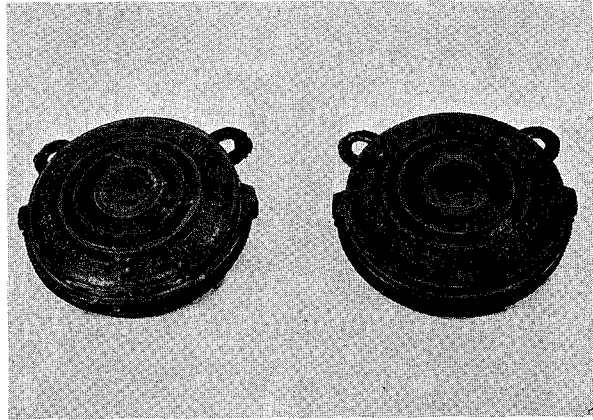


図2-53 鑊 口

ての子をわが嗣子として貰い受けるといったこともあり得るので、これらの真否はなお後世の研究をまつことにならう。

中 島

余野神社の社宝であり大口町の文化財に指定されている鑊

口の銘に、

左兵衛尉

「奉納神明大菩薩、寄進之慶長二年丁酉正月吉日中島左兵

衛。(裏に)延喜式曰立野神社是也」とある。

中島左兵衛尉なる人が、慶長期に余野神社を崇敬し、社殿を再建したり、鑊口を寄進したのであるが、そのしるされた銘からも、中島氏は、当地を主宰する地位にあったことがわかる。

大久地城は、戦国末期、織田信康が城主となったが、信康は中島豊後守主水正をもって城代とした。しかるに信康の子信清は、信長の攻撃をうけ敗れて犬山の木ノ下城に退去し城代中島豊後守が信長の命によってこれを引きつぎ、丹羽長秀がこの役目についた。

永禄五年(一五六二)大久地城は再び信長の攻撃をうけた。先手の大將は小折城主生駒八右衛門家長で、彼は前野党ら百数十人の士を引きつれて大手門から突入したが家長は傷をうけ一時退陣した。

その後丹羽長秀が、城代中島豊後守と談判してついに落城し、中島豊後守は信長に降伏したが、豊後守は城主が信康の子信清になっても城代をつとめた。しかし大久地城は、信清の手をはなれ信長のものとなり、つづいて天正一二

年の小牧山の戦後、城廓は破却された。

したがって中島左兵衛尉は、中島豊後守の継嗣と思われる。その居住した地は、「大屋敷字丸」、すなわち現在の役場の東の地一帯であったと思われる。

大久地域と、中島氏の城とはきわめて接近したところにあるが、当時の城は豪族の屋敷を称したことも考えられるので、小折の生駒城（生駒屋敷）のごとく、これも大久地域の砦の一つであり、中島氏の居住の場でもあったと考えられる。

中島氏は、鎌倉期から中島郡における名族で、一宮の妙興寺開山滅宗宗興（円光大照禪師）は中島家の出であって中島藏人は信長に随っていたという。

大久地城破却後、大屋敷字丸の砦にあった中島氏がいつまでここに任んでいて、いつ頃亡びたかは詳でないけれども、慶長二年（一五九七）ごろには、この地の豪族として栄えていたことは、前述の鰐口銘で明らかである。

寺沢志摩 寛永十一年（一六三四）七十一才で没した肥前唐津十二万石の大名寺沢志摩守広高は、小口出身の武人

であることが資料によってあきらかになった。

守 広 高

志摩守広高は父越中守広正（藤右衛門）とともに信長、秀吉に仕え天下統一の業に参陣し、多くの功

績をつみ唐津六万三千石の領主となったが、新田開発や、朝鮮の役・関ヶ原の功績でさらに加封され十二万石の大名となり、長崎奉行となり、キリシタン対策、諸外国との交渉に当たるなど、秀吉、家康支配下の重要な任務を果たしている。

彼の出自は、従来尾張の人とのみで、出身郷があきらかでなかったが、江南市前野の吉田家文書の「祖父物語あり、

藤吉郎殿の事」南窓庵記（孫四郎）に、

一、藤吉郎殿寄騎衆

○立木久左エ門 尾州奇木の人

○寺沢藤右衛門 尾州丹羽郡於久地村の人

とあり、この藤右衛門が広高の父藤右衛門広正であり、その後の戦歴があきらかになつてゐる。しかし唐津寺沢家は、三代兵庫頭堅高の代で断絶してゐる。